

ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ⑥

2023 年 03 月 16 日 日刊ベリタ

「渡邊会長は国軍の共犯者」

在日ミャンマー人、日本ミャンマー協会前で抗議デモ



抗議する在日ミャンマー人の様子



日本人支援者も抗議デモに駆けつけた



プラカードを掲げる参加者

日本ミャンマー協会長の渡邊秀央元郵政相と同協会最高顧問の麻生太郎元首相が 2 月、ミャンマー国軍のミンアウンフライン総司令官から名誉称号と勲章を贈られたことに抗議するため、在日ミャンマー人らは 14 日、日本ミャンマー協会前（千代田区）で緊急抗議デモを実施した。主催は、在日ミャンマー人コミュニティ。

日本ミャンマー協会前に集まった在日ミャンマー人たちは、「ミャンマー国民の気持ちに寄り添わない日本ミャンマー協会はいらない」、「ミャンマークーデターに沈黙している日本ミャンマー協会を強く非難します」といったプラカードを掲げ、同協会が入居するビルに向かって「日本ミャンマー協会は暴力ミャンマー軍評議会の共犯者だ!」、「ミャンマー軍評議会から名誉称号と勲章を受けたことの恥を知れ!」などと抗議の声を上げた。

抗議デモを呼びかけた在日ミャンマー人のミンスイさん（在日ビルマ市民労働組合会長）は「ミャンマー国軍から表彰された渡邊会長は国軍の共犯者だ」と語気を強めた。

また、ミャンマー支援に取り組む日本の大学院生は「渡邊会長は先日、（ミャンマー国軍から）勲章を受けたとの報道があったが、血にまみれた表彰を受けたところで、虐殺をしている人間に加担しているに過ぎない。このままだと、日本はミャンマー軍に加担している“人殺しの国家”と同じだ」とし、「日本ミャンマー協会、そして渡邊会長には一切の“ミャンマー外交”から退いてもらいたい」と訴えた。

ミャンマー「夜明け」への闘い（20）

国軍が村を焼きつくす

西方 浩実

6月19日。最近ミャンマーで、色々なものが燃やされている。1週間ほど前には、軍の攻撃を逃れてジャングルで暮らす避難民への支援物資が、軍によって燃やされた。Facebookで拡散される画像には、黒い灰になったお米や薬の残骸。3日前には、ミャンマー中央部の乾燥地帯にあるキンマ村が焼き尽くされた。焼け跡に座り込んで号泣する人たちの動画。柵の中で黒焦げになった家畜の写真。

▽村を離れた住民はジャングルへ

それにしても、なぜこんな田舎の村が燃やされなければならなかったのだろう。ミャンマー人の同僚に「何か特別な村なの？」と聞くと、こんな事情を教えてくれた。「数日前に別の村で、軍が交代させた村長（軍の息がかかった人物）を襲撃しようとした集団がいたらしいの。結局それは未遂に終わったんだけど、そのうちの一人が乗っていたバイクのナンバーを軍が調べたら、バイクの持ち主として登録されていたのが、キンマ村の人だったんだって」

はあ？と、思わず耳を疑った。そんな何の証拠もないようなことで、250軒あまりの家を灰にしたのか！・・・というのも、バイクの名義人は、使用者とは違うことも多い。だから仮に、そのバイクがキンマ村の住民名義で登録されていたとしても、実際そのバイクを運転していた人がキンマ村の名義人その人かどうかはわからないのだ（注）。外国人の私も知っているそんな事情を、軍が知らないはずはないと思う。

もちろん、もし本当にその集団のうちの誰かがキンマ村に住んでいたのだとしても、村をまるごと燃やす理由には到底ならない。それでも、こうして周囲の関係ない人を巻き込んで脅すのが軍のやり方だ。

軍による見せしめを、この数ヶ月間でいったいどれほど見ただろう。デモ隊をかくまっただけの人が殺され、CDM（市民不服従運動）に参加した公務員の家族が拘束され、軍を攻撃した人たちと同じ少数民族が暮らす村々が空爆された。本当に、卑劣。



焼け出されたキンマ村。国営新聞 Global New Lights of Myanmar にはこう書かれていた。「反政府テロリスト（＝民主派の市民）が村に火を放った。治安部隊（＝軍）は、平和な村人の家に火を放ったテロリストを逮捕するために頑張っています」（写真：AP 通信）

村を焼かれたキンマ村の住民たちは、村を離れた。ある人は市街地へ、ある人は近隣の村へ、ある人はジャングルの中へ。連日しのつく雨のミャンマーで、無事に暮らしていけるだろうか。

Facebookではすぐに、有志による寄付の呼びかけが始まった。キンマ村に心を寄せる人たちによって、投稿は次々にシェアされ、どんどん寄付が集まる。ミャンマーはかつて、4年連続で世界寄付指数ランキング1位を誇った国だ。世帯調査には、支出の欄に「食費」「教育費」などと並んで「寄付」があるほど、喜捨の文化が根付いているのだ。

きっとたくさんのお金を送ったのだろう、しばらくすると寄付を集めた近隣村の住民が、Facebookに写真を投稿した。「みんなのおかげで○○村にこんなに物資が集まりました！」。その投稿には、どんどんコメントがつき始めた。喜びや感謝のコメントではない。「村の名前は出さない方がいい」「早く投稿を消さないと軍が来る」

・・・もはや寄付さえも危険行為になってしまったのだ、と改めて思う。軍はミャンマー人の精神や文化をも破壊している。

▽「私の村もいつか……」

田舎で暮らす両親をもつ友人は、キンマ村の話をしながら、ふと「私の村も、いつ燃やされるかわからない」と不安げな表情を浮かべた。「えっ、どうして？何か狙われる理由があるの？」と聞くと、彼女は「特別な理由はないんだけどね……」と言いつつ、村の事情を話してくれた。

彼女の故郷は500世帯ほどある大きな村で、小さな公立病院があるそう。その病院の医療者はクーデター後にCDMに参加し、病院には医療者がいなくなったので、軍はかわりに近くの軍病院から軍医を派遣した。それだけなら良かったのだが、なぜかその病院には兵士も駐屯し始め、村における軍の拠点ができてしまったのだという。

当然、ほとんどの村人はそれをよく思わない。それに対し、良く思われていないことをわかっている軍は、警察官を動員し、連日のように夜中に村の人たちを逮捕して回るようになったという。先手必勝とばかりに、疑わしきを罰しているわけだ。「軍政下に僕らの人権はない」と話していた同僚の顔が浮かぶ。

「だから、村の人たちはずっと緊張しているの。もし村の人が精神的に限界に達して、軍に対して何か行動に出れば、私の村も一気に焼かれてしまうかもしれない」と、彼女は不安げに言う。ミャンマーの農村部は、木や竹でできた家が多い。一旦火がつけば、容赦なく燃え上がり、数分後にはすべて灰になるだろう。

「私の両親は高齢だし、特に父親は心臓と肺に持病がある。もし村が焼かれたら、父はきっと逃げられないと思う」。以前、お父さんが入院したときには、故郷に飛んで帰っていた彼女。その不安を思うと、胸が締め付けられる。こういう思いをしている人が、ミャンマー中にいったいどのくらいいるんだろう。不安な日々が続く。

<注>バイクを国内生産していないミャンマーでは、ほとんどのバイクが中国やタイからの輸入。輸入にあたっては、まず輸入業者などがバイクの持ち主として名義登録をする。そのバイクを購入した人は、購入後に名義変更をしなければならないが、その手続きにはお金がかかる上、変更しなくてもあまり問題にならないので、前の名義のまま使う場合が多い。

2023年03月15日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(21)

子どもたちの未来を奪う愚民化教育の再開

西方 浩実

5月1日。教育と、情報統制と、ワイロ。軍政時代を知らない私が「軍政になると何が嫌なの？」と、周囲の人に聞いたときのトップ3だ。「僕たちは、愚民化されていたんだ」。私が教育について聞くと、30代の友人は怒りに言葉を震わせた。ふだん穏やかで、ちょっと斜に構えたタイプの彼がこんな風に怒りをあらわにするのを見るのは初めてで、少し驚く。

▽若者に夢をあたえたNLD政権

「軍政時代、教育は常に一方通行だった。ただ決まったことを生徒にインプットするだけ。考えさせないんだよ」。いまいちイメージがつかめない私に、彼は語気を和らげて説明してくれる。「例えば、先



軍政の教育に子どもたちも一緒にプロテスト
(The Irrawaddy より)

生が『これは車です』と教えるよね。そしたら、生徒はそれが車だと『覚える』。質問の時間は一切な

い。車がどんな乗り物なのか、どこでどう役に立つのか・・・そういうことはまったく習わないんだ。」

確かにミャンマーの小学校からはいつも、生徒たちが声を合わせて、ひたすら何かを読み上げる声が響いてくる。事情を聞くと、生徒たちは教科書の中身をリピートして、丸暗記しているらしい。「僕たちは、考えるということを知らなかった。言われるがまま、目の前のことを受け入れるだけの人間になった」。

ただね、と彼は続ける。「NLD（国民民主連盟）政権が誕生してからのこの5年で、新しいカリキュラムがつくられて、ようやく変化が始まるころだったんだ。留学にだって行けるようになったしね。僕たちは、ようやく歩き出したところだったんだよ」。スタートしたばかりだった、これから変わるところだった、と彼は何度も繰り返した。

いつだったか、同僚3人と飲みに行ったときに、こんな笑い話を聞いたのを思い出す。

「私たち3人は、それぞれ4、5歳離れているんだけど、大学に入るための試験科目が、みんな違ったの」。例えば、それまで1科目だった「理科」という科目が、ある年から何の前触れもなく物理や生物など数科目に分かれるのだという。「そのたびに勉強し直さなきゃいけないわけだから、自分の年に科目が変わったら、もう最悪よ」

なんでそんなコロコロ変わるの？と聞くと、想定外の答えが返ってきた。「軍政時代は、教育省のトップが交代するたびにいろんな制度が変わったの。新しく着任した人は、前任者の踏襲はしたくないわけ。だから、俺はドイツ式だ、とか、今度は中国式だ、とかいって」

えー、そんなむちゃな！と驚いていると、もう一人のスタッフが、ダメ押しのようにつづけた。「それで、その人たちの子どもはどう思うと思う？・・・外国に留学するのよ。教育省で制度をつくっている人が、国の教育を信じてない。それが軍政期のミャンマー」。

そうなんだ、終わってるね、なんてワイワイ言いながら、ミャンマービールを飲んでいたあの頃が、なんだか遠い昔に思える。あの時、これは「悪い時代の思い出話」でしかなかった。

「軍政下では、みんなたくさんのことを諦めてき

た」。そう話してくれたのは、30代後半の友人。大学生のころ、彼女は海外留学を夢見ていたそうだ。

「あの頃、私はエネルギーに満ちていたの。絶対に外国に行きたい！と思って、英語もすごく頑張ったんだよ」。コネもお金もなかった彼女は、どうすれば奨学金がとれるのか、どこに申し込めば留学できるのか、片っ端から先生や友人に聞いてまわったという。でも、道は見つからなかった。

「そんな情報は、どこにも公開されてなかった。インターネットもないから、調べる方法もなかったしね。やっと民主化して、ようやくみんな海外に行けるようになったとき、私はもう30歳だったの」。Too late（遅すぎた）、と彼女は寂しそうに笑った。

彼女がいちばんエネルギーで、夢に溢れていたころ。この国は軍政下で、夢に挑戦するチャンスは与えられなかった。軍幹部の子どもたちが海外留学に飛び立つ後ろ姿を、彼女はどんな気持ちで見ていたのだろう。クーデター以降、ミャンマー人たちがよく口にする「子どもたちの未来がなくなってしまふ」という焦りは、こういうことなのか、と思う。

軍は、5月5日には大学を開校し、6月には通常通り新学期を始める、と宣言している。そして、CDM（市民不服従運動）に参加する教職員たちには「4月中に職場に戻らなければクビだ」と踏み絵を踏ませた。新聞に連日アップデートされる指名手配者の一覧には、今日から「先生」のリストが加わった。

教育は社会をつくり、国をつくる。愚民化教育がまた始まるのか。それとも市民が団結して拒否するのか。未来をかけた、静かな闘いがつづく。

▽「軍政下の教育は受けない」

5月5日から大学を再開する、と宣言していた国軍。さて、その思惑やいかに。

結論からいうと、再開は失敗した。生徒も先生も、ほとんど戻ってこなかったのだ。「軍政下の教育は受けない」という、ミャンマー人たちの確固たる意思表示。

この決意の代償は、出勤しなかった教職員の大量解雇、だった。ヤンゴン大学とマンダレー大学という、トップ1、2の大学では、教授から助手にいたるまで、実に731人が解雇された。公務員宿舎からも3日以内に立ち退かねばならないという。

5月9日。ヤンゴン郊外出身の友人は、こう嘆いた。「この2つの大学は、ミャンマー人みんなが憧れる、特別な大学なの。ヤンゴンで生まれ育った子は、誰もが一度は『大きくなったらヤンゴン大学に』と夢見て育つんだよ。そこの先生をクビにするなんて・・・みんなの夢や憧れの気持ちも傷つけられたみたい」

大学の先生は研究者でもある。様々な学問分野で研究成果を出して、国の方向性や土台をつくる人たちだ。軍は、代わりのいない人材を切り捨てた。ミャンマーの未来が死んでいく。軍事クーデターによってこの国が失うものは、計り知れないと、改めて思う。（ちなみにミャンマーの大学はすべて公立なので、ミャンマーにいる限り、国立大がダメなら私立大で研究を続ける、という選択肢はない。）

教育制度も大きく変えられようとしている。これがまた、まったく意味不明な改正だ。ミャンマーの学校は、11年制。一応、小学校（5年間）、中学校（4年間）、高校（2年間）に分かれているが、日本のように「中学1年」「高校1年」などとは呼ばず、「グレード1」から「グレード10」まで、1年＝1グレードで、着々と進級していく。軍はこれを「1年＝2グレード」にする、というのだ。つまり、進級のスピードを、これまでの2倍にするということになる。

え？何のために・・・？思わずミャンマー人の同僚を質問攻めにする。「みんな5年そこらで、アイウエオから高校卒業までの内容を終えるってこと？それとも、グレードを増やすの？今度は全部で何年？」。同僚は、困惑顔でこう答えた。「そういう細かいことは何も説明されてないんだ。目的もよくわからない。ただ、国営放送で『1年＝2グレードにする』って放送されただけ」。

決まったことを一方的に伝えて、説明も質疑応答もない。これぞ、まさに軍政時代の教育そのものではないか。そして、そんな理解不能な状況の中、軍は、6月1日に小中高の基礎教育も再開すると宣言している。

いったいどういうことなんだ、と国営新聞に載っていた教育省のミーティングの記事を読むと、全生徒にノート12冊と鉛筆4本を支給し、中高生にはさらにペンも2本つけます、という超どうでもいい内



若者たちのパフォーマンス。軍政下での教育の再開は、抑圧と脅しによるものだ、というアピールだ（The Irrawaddy より）

容で、思わずため息が出る。何がどうなるのかわからないが、とにかく全ては軍の思いのままだ。

先生たちの訴追は、今日も続いている。国営新聞には、医療者10人と先生10人の指名手配リストが、毎日律儀にアップデートされる。罪状は、刑法 505 (a) (注)。クーデター後に軍はこの条文を修正して、CDM への参加を犯罪と規定したのだ。

CDM を熱心にサポートする知人は、こう話した。

「医師や教師は、この国で本当に尊敬されてきた職業なの。それが今や『犯罪者』にされて、逃亡生活をしてる。胸が痛い」。

彼女は、CDM への決意と迷いについても語ってくれた。「公務員たちはみんな、絶対に軍政に抵抗すべきだと信じてる。非暴力で戦うには、もう CDM しかないのもわかってる。でも、いつも自分の胸に問うているの。クビになって、家や収入を失ってもいいのか？患者や生徒を見捨てることにならないか？本当にこれは正しいことなのか？って」

決意と迷いが、交錯する。苦悩しながら、それでも前に進む。静かな闘いが、決死の覚悟で続いている。

<注> 第 505 (a) 項はもともと、軍の士官や兵士が反乱を起こしたり義務を無視したりするよう扇動することを罪と定めた条項だった。しかしクーデター後に修正された条項は、軍人だけでなく公務員のモチベーションや規律などを妨害し、軍や政府に対する憎悪・不服従を扇動するようなあらゆる行い（つまり市民的不服従運動そのもの）をターゲットに含めた。最高で禁錮3年と定められている。

ミャンマー「夜明け」への闘い（22）

「わが子を学校に通わせるべきか否か」 西方 浩実

「うちの子は、小学校には通わせない」。もしそう言う親がいたら、どう思うだろうか？子どもがかわいそう？親の身勝手？ミャンマー全土では今、多くの親が頭を抱えている。我が子のために、学校に通わせるべきか、否か。

5月25日。昨日からミャンマー全土で、公立学校に通う生徒たちの登録が始まった。毎年この入学登録のためにたくさんの親子が学校を訪れるらしいのだが、報道で見る限り、今年はどこも閑散としていたようだ。

私の友人も「息子は学校にはやらない」と決意の表情。なるほど、「軍の奴隷教育には反対！」という意思表示だな、と早合点した私に、彼女は切実な顔でこういった。「息子の命が心配なの」。えっ、いや、そんな大げさな。軍政下の小学校に通ったところで、兵士にされて戦場に連れて行かれるわけじゃあるまいし。

そう思ったが、彼女の説明を聞いて、合点がいった。「私の夫は、CDM（市民不服従運動）に参加している公務員なの。子どもが公立学校に通い始めたら『CDMをやめて職場に戻らないと、子どもを自宅に帰さないぞ』と人質にとられてしまうかもしれない」

ああ、それは・・・ありえる。残念ながら。軍はいつもそうなのだ。ターゲットの人物だけではなく、その人の周囲の大切な人たちを使って、追い込んでいく。今までそうやって、ターゲットの配偶者や子どもたち・・・まだ生後数ヶ月の赤ん坊までが、軍にさらわれていったのだ。

「でも、学校に通う登録をしなかったら、それはそれでブラックリストに載るかもしれない。だから・・・登録の名前だけ書いて、通わせないようにしようかと思っているの」。そんなことできるの？と聞くと「たぶんね」と頼りない返事がかえってくる。みんな、何が起きるかわからない中で、少しでも安全そうな選択肢を探りながら生活しているのだ。

子どもを学校に通わせることへの心配は、ほかにもある。ひとつは治安。最近、ヤンゴン市内ではど



クーデター直後の2月、ヤンゴンで撮影された写真。軍政下の教育は「奴隷教育システム」と揶揄され、現役教師たちも猛反対している。（TheIrrawaddy より）



5月中旬、ミャンマー中部で行われた、教師による軍政への抗議デモ。教師も生徒も、白いシャツと緑のロンジーの制服を着て、堂々と歩く（The Irrawaddy より）

こかで爆発や銃撃が毎日のように起きている。（ただしヤンゴン市内、といっても、ヤンゴンはかなり広大なので、そこらじゅうでバンバン爆発しているわけではない。）

学校の周囲でも爆弾が爆発することもある。新学期からの開校に反対する市民によるものか、そう見せかけたい軍によるものか、私にはよくわからない。確実に言えるのは、学校でさえ安全ではないということ。

さらにもうひとつの心配は、新型コロナだ。実はミャンマーの学校は、昨年1年間閉校していた。つまり、公立学校の生徒たちはみなすでに1年留年している。これは医療体制が脆弱なミャンマーで、コロナの感染爆発を防ぐための政策で、当時の NLD（国民民主連盟）政権は「生徒みんながワクチンを打ったら再開します」と宣言。ワクチンが開発されるや、日本とは比較にならないスピードで承認・輸入し、色々な「不要不急」をあざやかに後回しにして、2021年1月には接種をスタートしていた。えっ、もう？と、その速さに驚いたものだ。

2022年6月（ミャンマーの新学期）までに、すべての子どもにコロナワクチンをうつ。そして、みんなが安心して登校できるようになってから、学校を再開する。そんなアウンサンスーチー政権下のプランは、2月1日に終わった。クーデター前は1日1万2千件；2万件あった検査数も、クーデター後は1日約1000件程度になり、最近はやや公表もしなくなった。

友達は自嘲気味にこんなことを言っていた。「周りの国でこれだけ流行っているんだから、ミャンマーにも感染者は絶対いるよね。でもね、もし感染爆発しても、軍は隠すと思うよ」。

軍は公立病院でワクチンを提供しているようだが、少なくとも私の周囲では、軍の提供するワクチンを打った人は見たことがない。さらに今月追加でワクチンが届いたというが、中国からの支援とあっては、市民たちが喜んで受けたとは思えない。結局、コロナに関しては無策な状態で、学校は再開されようとしている。

子どもたちは、もし学校に通わなければ、留年2年目になってしまう。もちろん、それはどうにかして避けたい。冒頭の彼女も「なんとか学校に行かせてあげたい」と、学費の安い私立のインターナショナルスクールを探す。夫はCDMで給与を受け取ることができず、家計は心もとない。それでも「民主政権が戻るまでだから」と、その復活を心から信じ、子どもの命を守ろうと奮闘している。

▽NUGがオンラインスクールを開校

6月、ミャンマーの小中高校が再開した。昨年1年間、コロナで閉校していたミャンマー。今年出席

しなければ、子どもたちの教育は、2年も遅れてしまう。にもかかわらず、地元メディアによれば、ヤンゴンの生徒たちの出席率は、わずか1割程度だという。軍政への不服従を貫く市民たち。その意志の強さと団結力には、本当に舌を巻く。

6月12日、2児の母親である知人は、明るい口調でこう話してくれた。「ママ友とのメッセンジャーグループで、確かめ合ったの。みんな、絶対に子どもを学校には行かせないようにしようね、って」。

それでも1割の生徒は学校に通っている。そういう生徒や親たちは、市民からの批判の対象にならないのだろうか？友人に聞いてみると、こんな答えが返ってきた。「先生も生徒も、通学するときには制服を着ないように、って軍がアナウンスしたんだ。だから誰が学校に通っているのか、外からはわからないんだよ。みんな制服持参で登校して、学校についてから着替える。学校だけじゃないよ。他の公務員も省庁職員も、今は制服を着ていない」。

もちろん、通学する生徒や公務員が誰かに襲われたりしてるわけではない。おそらく軍は「子どもを通学させたいけど、周囲に批判されるのでは」と心配する親たちに、安心して軍に従ってもらうため、こんな通達を出したのだろう。いずれにせよ、学校に行くことや、公務員であることを、隠さなければならなくなってしまったのだ。静かな異常事態。

一方、民主派の亡命政府 NUG（国民統一政府）は、市民の不服従への頑張りに応えるように、オンラインスクールの開校を発表した。もちろん無料で、NUG が政権を取り戻した暁には、正式な通学期間としてカウントされる。

オンラインスクールに参加したい生徒たちは、決められた日に Google Form を使って登録し、Zoom で授業を受ける予定だという。講師を務めるのは、主に CDM に参加中の教師たちだ。2月から CDM を続けている学校教師の知人は「オンラインで教えるのは初めて。どうやって進めたらいいかな」と準備にそわそわ。もう先生として登録したの？と聞くと、「うん、今度 NUG の教育省がオンラインミーティングを開くから、それに参加するの」と言う。

民主派は、政府もバーチャルなら、学校もバーチャル。教師の給与はモバイルマネーで送金される予定だというから、世界中のどこよりも先進的な政府

が誕生したのでは、と思ってしまう。ただ、NUG が4月に CDM 公務員に約束した給与の支払は、まだ実現していない。あらゆることが軍の監視下に置かれたミャンマーで、送金者も受取人もバレることなく、数十万人に給与を支払うのは、想像を絶する難題なのだろう。

友人の学校教師も、もちろん給与は受け取っていない。それでも彼女はこう言い切る。「私は給与がもらえるから CDM を続けているわけじゃない。これは私たち自身の問題なの。」

オンラインスクールが始まるにあたって、個人的に心配なのは、軍によってインターネットが遮断されやしないか、ということ。実は先週の夕方、約2ヶ月ぶりに全国で一斉にインターネットが止まったのだ。

私自身、大事なオンラインミーティングの予定が入っていたので、えっ、今日に限ってどうして！と困り果てたのだが、そこには何ともアホらしい事情があった。実はその日の夕方5時から、NUG が国民向けに今後の方針などをアナウンスする予定だったのだ。軍は、ミャンマー人がそれを観るのを阻止す

るため、全国のインターネットを切った。

その日、電話をかけてきた友人は「本当に軍はアホだよ」と鼻で笑った。「インターネットが繋がったら、また何回だってできちゃうのに」。そして、約1時間後にインターネットが復活すると、外国を拠点にしている（＝ネット遮断の影響を受けない）ローカルメディアなどが録画を配信し、NUG からのアナウンスは、すぐに国民に知れ渡った。

「結局軍は、自分たちは NUG が怖い、というのをみんなに晒しただけ」と、友人は愉快そうに笑い飛ばした。

オンラインスクールも、もしかしたら軍に邪魔されるかもしれない。だけどこの調子なら、ミャンマー人たちは、軍の嫌がらせさえ弾みにして、さらに元気に高みを目指すだろう。軍政をひっくり返し、民主的な国をつくり、子どもたちが学校に通って自由な教育を受けられるようになるまで、まだまだ市民の抵抗は続く。

